新撰

# 女諸芸法式

下

目録


一御すゝ札の法
一花をまゝらの式
一紙料紙文の式
一書面書名の式
一奥紙横紙の式
一火作の式 奥つぎ
一色紙の心得
一廻文の法 折ぬの式
一膳椀飯食の式
一湯漬粥の式
一婚礼作法 式
一行年数之伺
一飯汁の法 本
以上七十六ケ條
一女子の平生の事 中
一上中下のしなの辨
一扇子小刀の式
一小袖と水えんぜん
一屏風帽額の式
一陣ぐるまの式
一茶の花乃心得
一通いの茶けん得
一付茶引着の式
一茶書付図式
一大和言葉
一折紙結ぬの図式
一十干十二支の図



四七9
1035
2冊

# 下之巻目録


常の居ざるひのる事　二丁
客人はじめて出る事　三丁
主人分作と為る事　四丁
同客と扣法はる事　四丁
数乃人は物中上る事　五丁
女男の帯ゝ結る事　五丁
主客盃を受る事　五丁
反水を飲ぶる事　五丁
巻を引流中入る事　二丁
硯をまいふる事　二丁
小刀を引ふる事　三丁
硯料紙を持る事　三丁
香盃香盆盃持る事　四丁
文箱持上結る事　四丁
小袖を出せる事　五丁
鼻紙を引ふる事　五丁

客を結ぶ事　六丁
人ふるまひの事　七丁
床の間の花のる　十五丁
掛物のもの事　十五丁
通ひの者ふるまの事　十八丁
結び文を人に渡す　十九丁
阪つぎゆうの事　廿六丁
汁をかける事　廿六丁
冷汁つぎ様のる　廿七丁
湯つぎ様の事　廿七丁
面の者ふるまの事　廿七丁
楊枝を渡せる事　五丁
茶を出せる事　六丁
屏風立様の事　六丁
燭台立様の事　六丁
火鉢立様の事　七丁
門表とつぐ事　七丁
孫子来ひ様の事　七丁
種よつく時ぶきの結　八丁
陰子様立様の事　八丁
結ぶ様のる　八丁
香の物の事　十七丁





阪を結る事　廿七丁
結を下る事　廿八丁
茶式を出る事　廿八丁
婚礼式の事　廿九丁
見合の事　廿九丁
吉日を名ふる　卅丁
同縁の図　卅一丁
結納の事　卅三丁
持参物の事　卅一丁
同縁書様の事　卅四丁
嫁入附り聟入のる　卅四丁
湯をのむ事　十七丁
湯漬の事　十八丁
粥の喰ふる　十八丁
肴の事　十八丁
茶の事　十九丁
門道をのる　廿五丁
書きもの事　廿七丁
門のぶる事　廿七丁
組附渡しの図　廿九丁
式三献引渡の事　四十丁
祝盃のる事　四十丁

新増女諸礼綾錦巻之下


茶道交礼法の事　廿四丁
婚姻さうづき結ぶ　廿五丁
雑煮引くの事　廿七丁
色直しの事　廿八丁
衣桁陽礼事　廿八丁
門男　廿八丁
所厨子黒棚陽の事　廿九丁
門男　廿九丁
婚礼産礼忌明の事　廿九丁
鴻臺乃図　廿九丁
鼻紙袋拵小袖模様　卅丁
大和さゝ菱　卅一丁
折形色物乃図　卅二丁
結びもの礼男　卅三丁
激浪乃みちひ　卅三丁
十干十二支　卅三丁

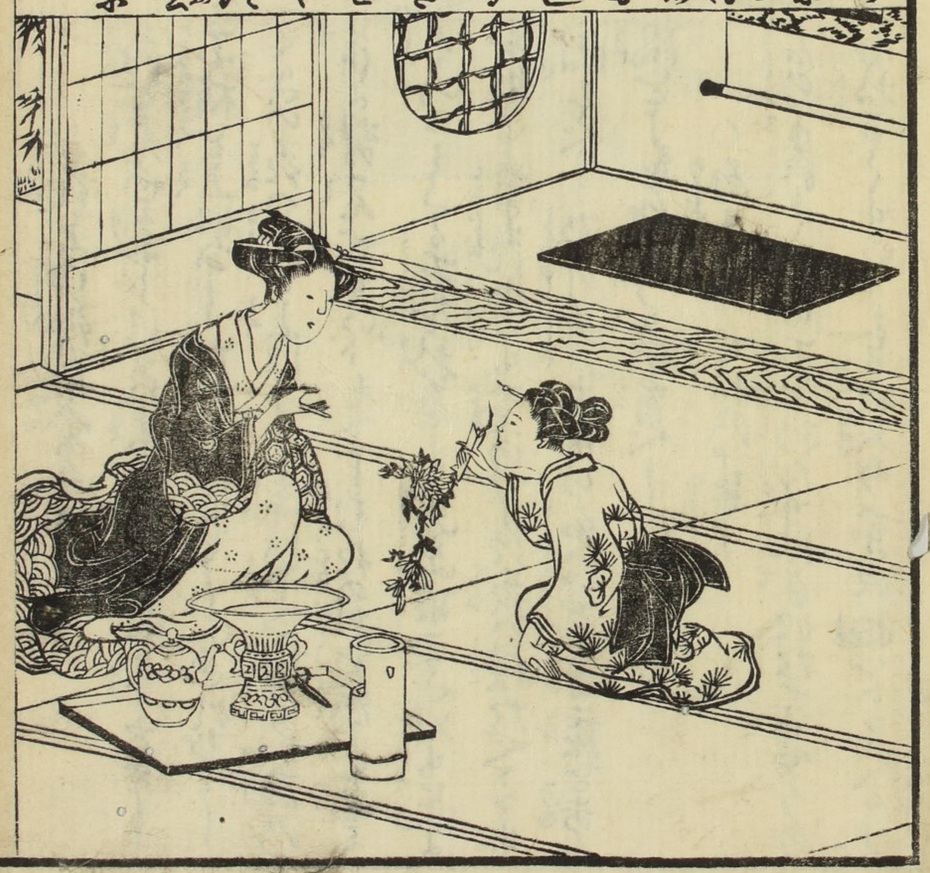

下之巻目録終

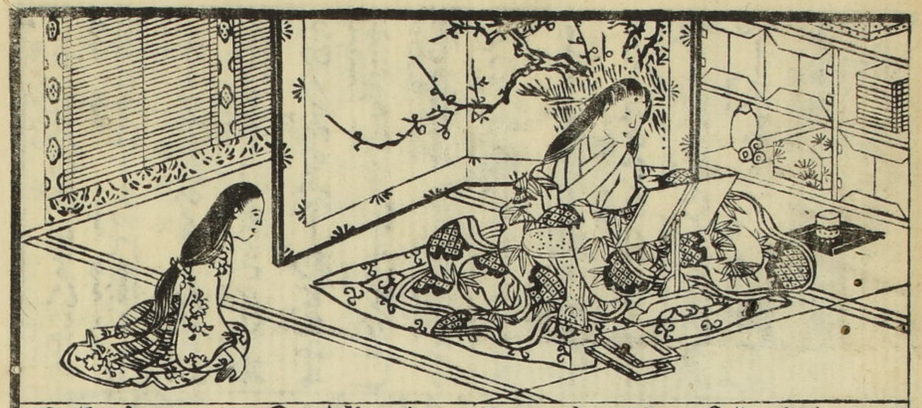
# 御高札寫大略

一 新たに夫婦になるもの諸親類ふ
ゝ〳〵下人等にいたるまで是を慎むべし
主人あるものハおのゝ〳〵その分に
相ちがいなく稼ぎ事
一 家業をなまけ惰ることなく万事
ていねいに慎むべき事
一 酒をなし又ハ無理といひ過ぎ人の
害になるべき所をのべうさざる事
一 博奕の類一切禁制の事



○女房のみだらをいたの
擽とゝ〳〵右れ擽とゝ
あうけてたのをとたまれ
ものをまれ行ものをあと
ふりみたのふべ和と云事
をみどりのつゝもけてのは
見物のるもとた寝るる
人ハ身の使へもちゞけるを
のんをのつを指も写れで
をくををを先ゝてつく
べゝびをを行のまれを
べゝ又をもたる人よあと云
ふたのをとたの使の上ふ
ををくいべゝ





○花と四季の入る事

花と見せまゐらるゝ木の花い事と下ゝ

茶椀とよりゝ上にゝ　たりゝ指てをゝいぐにゝ

くさの花いかと上にゝ　茎ゝ下へさげゝ右乃

ゝよゝ樽ゝんせまゐらをゝ　むゝ花のかと紙ゝて包ゝ

をゝつゝゝゝるゝを指ゝ　又ゝ取ゝゝはゝ是ゝ

ゝゝれゝゝ　ゝゝ茎のつゝゝ花い横ゝくゝゝ

波をゝゝ　ゝゝ乃ゝ時ハ尚ゝ　ゝ指ゝ日陰と歩ゝ

風とゝを　ゝんゝづゝひ賞ゝ

○石まゐらせ指乃事

右のゝゝ　ゝゝ要の石と指ゝゝれゝゝにゝてゝるやゝの

ゝ指ゝゝ　ゝゝまゐらゝる也又ゝゝぎゝ指ゝとゝくゝゝ

○豆人形を人の出発をゝれゝゝ

てゝるゝゝ　ゝゝゝゝひゝるゝゝく

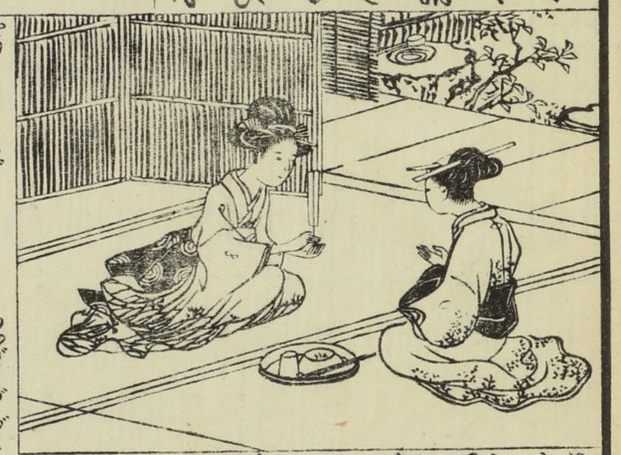
桑とゝゝ　ゝゝ薄ゝ徒のゝゝ羽

ゝゝく豆ゝるゝゝく歩ゝゝ

ゝゝゝれゝ　ゝゝ赤ゝ

時ゝゝて　ゝ役ゝゝ

と紙ゝゝ　ゝゝれゝゝ時



出をゝゝ　ゝゝを人のゝゝ

べゝゝゝ　ゝゝて夢のゝゝ

たゝゝゝ　ゝゝて出ゝ

○小刀まゐらせ指の事

小刀ハ指のゝゝを指ゝゝ

家方ゝゝ　ゝゝて

べゝゝゝ　ゝゝ我ゝゝ

上のゝゝ　ゝゝ人のゝゝ

指ゝ長ゝ　ゝゝべゝ　ゝ刀ハゝゝ指べゝゝ

○硯料紙と指ゝる事

硯ハ海とゝゝ　ゝゝ紙ハ切目と我ゝゝ方ゝゝ

硯ゝ長の下ゝ　ゝ指ゝゝ　ゝゝべゝ　ゝて　ゝゝ

おろうとて雅楽ふべうぐに
いう間どおろーしなるえんおう
とたて筋ふすぎきるのまと
汗とぬぐひ茶とめーちぐ
とろすのちくちなすぐに

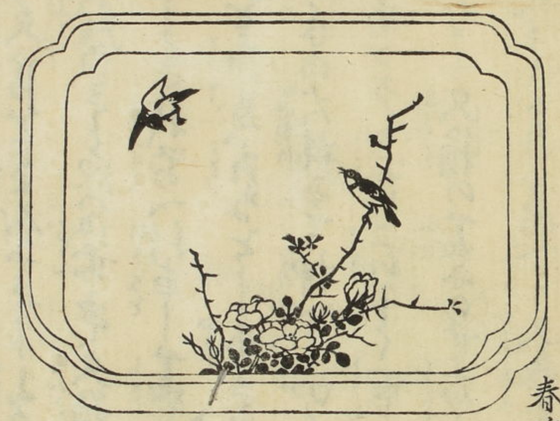
主人のたりの方ホ盃をぐホこれる硯箱をとれて
右の方にかとーー盃ととり去れすに盃てえべー
番盃番盃ホくもろる事あるも

○番盃番盒をとれ様の事

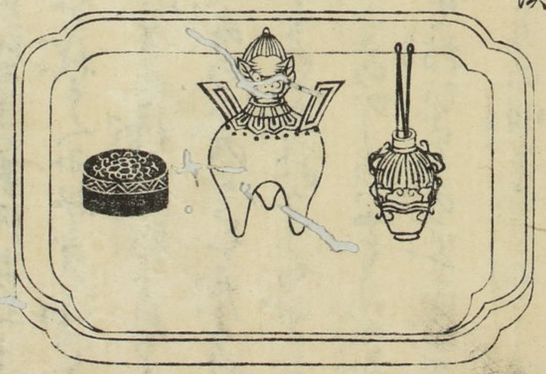
番盃番盒その外をぐて様様ホ上下ある物と
まいふもろる時ハ人形ホハ家紋ある物ぐ
ものぐ皆ぐのうをと家ホなー様くいぐ
扱所茶ホ盃さ白ホ取盃ーかーらのすと我まくホ
なーー本と主人よ命ふうに盃ぐーーまくばんに
金ぐん純子流番ろぐ其外何ホもぐてぐに
とれハ本ホあるりもうの抱ハ本と為人へむ工様工
んぬべーー又番盃に番煙番だし番盒とあき



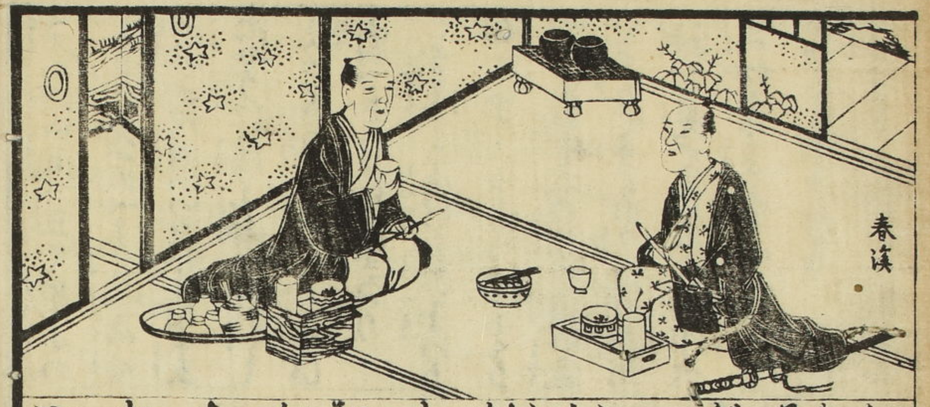
るん流の間へ立て足ホの
ちぐとろにべーーふるの
成ぐれ時ハいうにも同ふ五
ぬるに陸ふ向ひてにべし
ろくふろ花もん番ひ
有ぐさるの行要るの
○主人ふの作とおまるる
ふもホ上るホもいうホまう
やくるる主人のたの様の通
とろてホるる但ーたの
紙と見てホ上言の中に
大切るるの有時ハ口後と
ふふーホべきかう
○同事とおぐろ成時ハ



春溪



合るる番煙中番盒ハぐり番ぐーハ右ふ
盃形ふ但ーー番煙豆あふハ一ッを茶ホて盃せ
番煙とふ人ふ渡ふ結ハ豆一ッをすくにかーー二ッを
むふとかぬべーー渡ーーふたりのふに結て右の



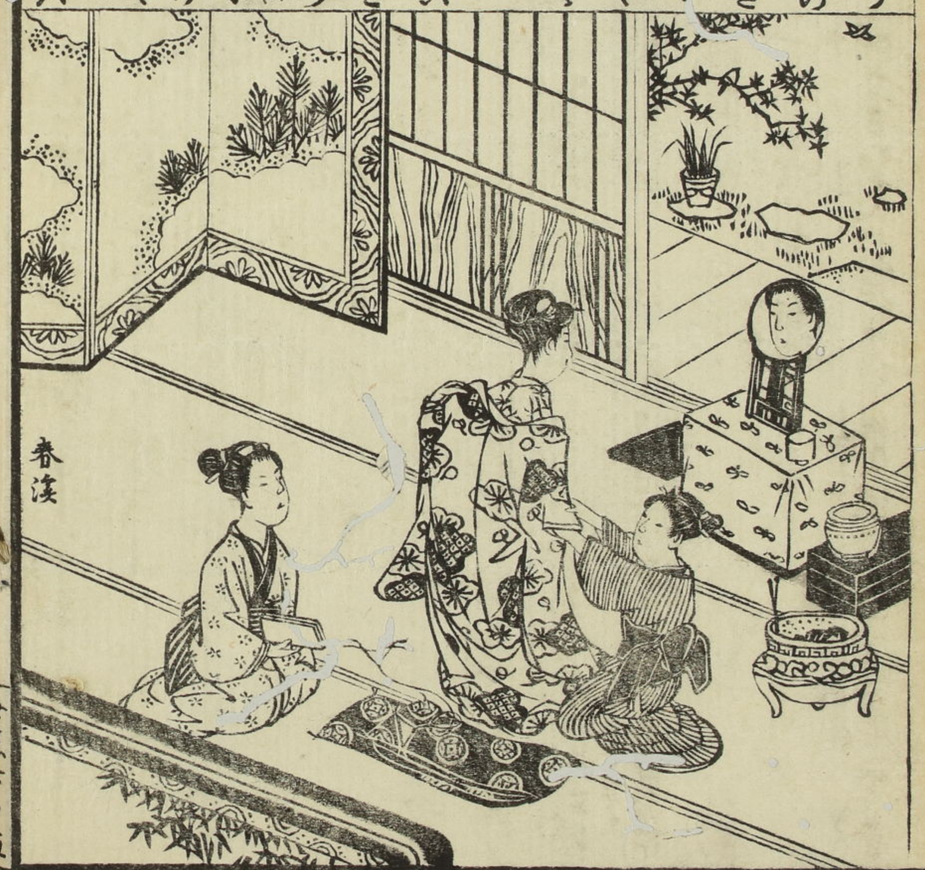

手と香炉を添てさしうつ文元ゆもんの宿べし
又焼香ハ前ぜんの人ハ右ふ者合と共さ香だしハ中たさ
ぐ〳〵いむうふる事べし
○文箱を上ゆ〳〵ハ
文箱を主人ふさ〳〵ろハ対あふべ其後出べし
対ろ〳〵ハ茶を文箱と我ま〳〵ふ扨ま緒を
〳〵き我ま〳〵ハ蓋〳〵蓋とうて仰け取れる
と紙文へ元ちと〳〵蓋さて各の下のうをたうれ
手の大指ゆて押べ〳〵ゆくられ各れうらゆし
あゞろ〳〵ゆを右ゆく取上字のゆ〳〵らハやうう我文へ
な〳〵文箱の蓋ふの世右ゆて指ひゞうの手紙て
〳〵まゆ〳〵ひべ〳〵文各だうのはもさ〳〵ゆて指



たのまとつさ同ひざとあぬ
たのひざとたのひざの上に
手ようみ紙と紙の又合ひと
ふみ〳〵ゆうみたゆろ〳〵
○数の人ふかのゆ上ろ時ち
ちと我紙とろ紙へ肩てい〳〵
べ〳〵則ゆちつゞ息のゆ〳〵ぬ
ゆう〳〵のんづうひろう
○男の袖でるゆ〳〵袖ゆも
かきにゆ〳〵ゆあく〳〵ゆほど
きゆ〳〵男女同ゆ〳〵袖ゆ法
ゆ〳〵ゆる〳〵垂ゆ人の袖ゆも
ゆ〳〵たり
○主人食の人ふりのこゞ

右のゆ〳〵ゆ宿べ〳〵
○小袖を出せ給ゆ
小袖をきせ給ゆ
ひゞうの袖と連させさそ
右の袖と連〳〵ゆふ
帯の中程ゆと指てさ〳〵
上ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
○鼻紙を給ふ事
鼻紙ハ二帯にたゝ切目をむふ〳〵〳〵紙たゝの
袖の下にもち主人の左の袖の下へ給ふる也
○楊枝給ふ事
楊枝ハ盆ゆのせくゆ〳〵ひ〳〵ゆ〳〵箱遠く

清ドのふ時いんうくあとう
とくあすびなまえまつその
帯ゆ結合さべ行乱ゆきき
ゆうをいて其ゆをとうこの
べし笑耳とたてたちぎく
ちやどをるうすくふるもの
宿ますびなりの也
○ふれとまるふをる事へ
所月ひく先ひしやの拭と
たりまそとり布まて敬乃
うとをとうそのくべしふ拭
い家府ゆうけて也をとうけ
えて肩を家れべふ拭
ふらせらるうり上ふれてふ



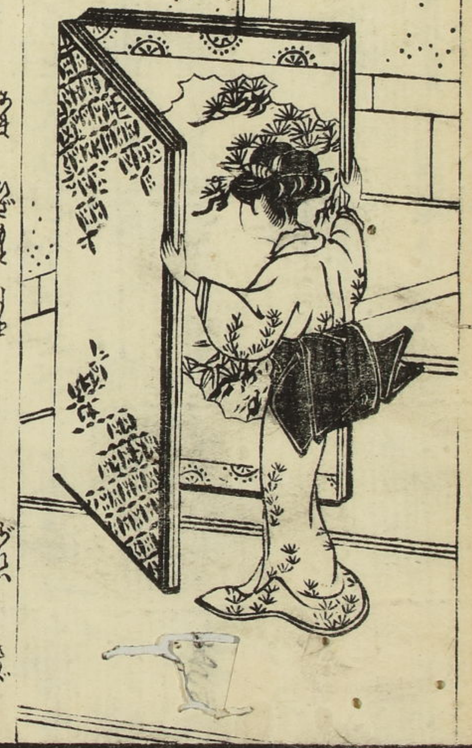
春渓

女文下ノ五

ふうれ方とうまを人の右へちて手をうはべし
○茶をとる手をうを事
茶ハ茶基ゆのせうく毒ゆ右のをゆうちち
たりのをとあゆ源て也はべし
○扇風を中うの事
事絵ハ上彩色ハ下絵く一双るふ絵のかき
ちをとと絵りと下に色べし墨源ゆ墨絵を
下古色ハ上彩筆ハ下ゆとゆうはる
色べし立るふれハ事を二つふうみて色段
九色へ平くだて
○燭台を絵乃事
燭台ハ先一社ゆく豊祝の人ゆをへて墨

正月二日の四ツ時ハ武
士有事に家にのこり
○おそと侍る時のる先
月一日掃除ス金とへ
陽ハめいくにおいてなし

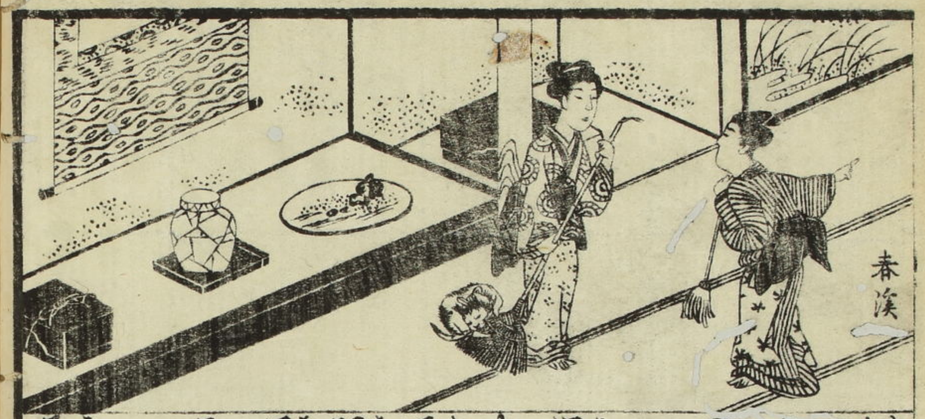
べ〜ちゃ〜陽り練えへ家ことなるハ宜之但〜
豆二ツを老人の数へなくて豆べ〜又煎茶くの
ちん切ゆうハ数あるとハ取扱ひて燭ゆうり
ゑるのうて切べ〜燭豆一挺の時ハ豆なるゆう
切てよ〜煎燭と燭〜ゆるゑハ陽ゑゆうり手
燭ふとの〜ねゆて豆べ〜燭さ〜とにく





味ハ花ゑど有なきゆえ
其ハ花夏ハ瓜秋ハ菓冬ハ
火とむ〜〜ゆゑ後
ゑ〜ハるゆうせう
客接ひて料理遅きハ後
ろべくゆべさんゆゑも社くつくや
客や料理とゆゑもゑ悪し
ゆうゆうきゆゑ先釜とおし
行ゆとゑ人合せて出べ
○人ゆ招ゆれ〜り時ハゆゑ
遅きも宜〜くゆべ切浸い
たくべたゆゑハ用るゆうたさ
豆て約べ〜其ゆゑゆうゆ
て座ゆゑ掃除ゆう味の

べくゆべ但〜婚礼の夜ハ切と豆ゑ豆ゑ〜〜陽ゑ
ゆうゑ燭ゆ燈〜出て豆ゑ豆ゑなり
○火鉢豆結の事
火鉢も燭豆のおく〜豆二ツを客人の豆へ向く
豆べ〜又火ゆ陰ゆうゆ炭のおゆうゆうたる豆
陽の火く半過白炭ゆ炭ゆゑハ陰ゑ火なゆゑハ高




茶碗の上に置て湯の大ふあつくまゐらせべし濃うすい茶は大ふ不体裁の大箸いろ人の方へふちへ〜せかきてこそ置べし

○門炭をけぐ事

炭をけぐふは炭箱ふ炭箸を取くて持いぐまづ大ぢ〜にく下大と直〜故大ぢ〜ふとこの下へ出〜置て炭ハほにく置べきこかくてのち炭箸ふ炭箸ハ拭べし〜炭箸ハ拭れ炭箸ふ炭箸ふ炭箸ふ

るゝと頻ふ自退して主ふざはい却て不徳ふて
見苦しく料理ゐど出ゐる者互ひふ辞退しく
さゝぐ恒例かげんふそんをるにもゝぶ大ふ不れこ

○藤子煖たてあけの事

いづくもそれ〻もあれ〻祖の方とゐゝきて出入をゞし
ゐなゞゝ出入をゞゝゝぶたの長つき右れをそ
なけたてをゞし

○猪ふ居り猪の事

七五三。五五三。五三三ゐど祝ゐ賀のかれた町家
ふてハまれる氣半鮫ふきふ半ゐせ寅にをゞゝ
別書よ寅〻く出せゞ丈と見ゐゝたゞしまづ猪よ
をゐ猪ハまゐ〻ハ居ゞどふし角にをゐゞし



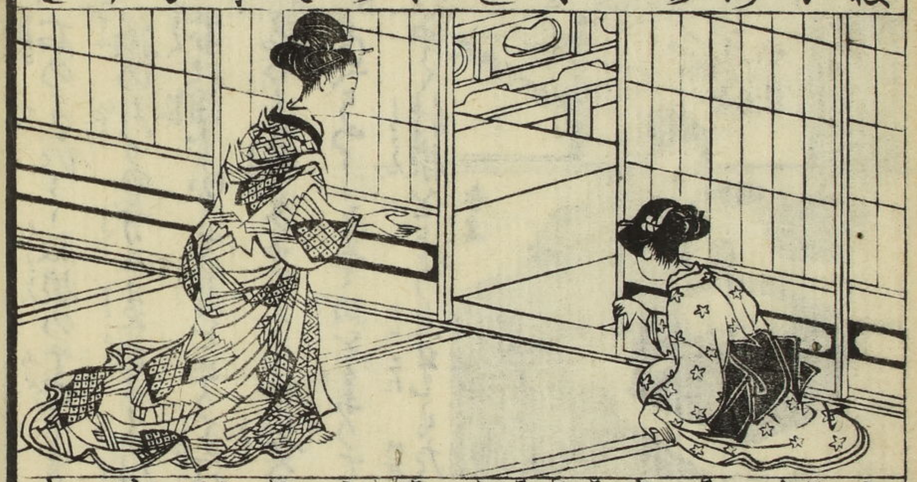
阪うゞゞ云並べたるハ右のゝひく阪桃の蓋をとりゐゞりれをゝうゝし
ゐもゐる却て不れるれゞ猪の方ゐの方ふ至ゐまゝ汁桃乃ゐゝを取る事
ゝゝゐゐるあゞし茅に同じかて箸をとり上汁ふくもし れされを
ゐの出ゐゐれむゞこ咎べゐゐ
ゞゐゞゞの心を寅ひし事 ちゐし甚ふ甚ゝをたし を拭ゞ阪桃を入上た乃
ゞゐるゞバゐるそりあゐ ゝをゝ阪を寅りて下にふまゐゝ右れを
心をつけそれ〻ふ接ゐ ゝ汁桃をとり上呂もたゝ〻うゝし汁を吸ひ
ゐゞきるゐふこを

○祢の間のゐん中ゐ出ゐと
ゐん〻甚のゐ子をゐめをゐゞ
三帽ゐれ掛ゐめるれバ一ふ
中二ゞんふた三ゞんふ右と
ゐゐゞし祢のゐゐ〻ゐをゐ
けてゐんゞゐゐゞ茅ゐふを

右のゝひふ入て下ふおき
又右れおゝ〻ふ阪をゝひ
汁を吸ひ寅を咎ゐ猪
猪ふつきゐる葉を咎べし
義後ゐても阪汁茅ふ
まゐし咎べしゐゞ

ろの横ゝ敷ゝる事二枚を清てゝるべしまた新
ゝ鍋にてゝる時へゝ鍋の
柄を向へ出し火をゝのが
まにまにてゝるべし

○掛ゝものとゝるゝゝ
ものを法をゝき風帛を出し
ものを法を照へゝ若年に
ゝみて右のゝに掉をもち
右のゝに掛物をもちて
行ゝゝ掉を右のゝて
拍ゝゝ油の左右ゝ
をゝみさゝくゝとゝ
ゝゝきゝ掛べし



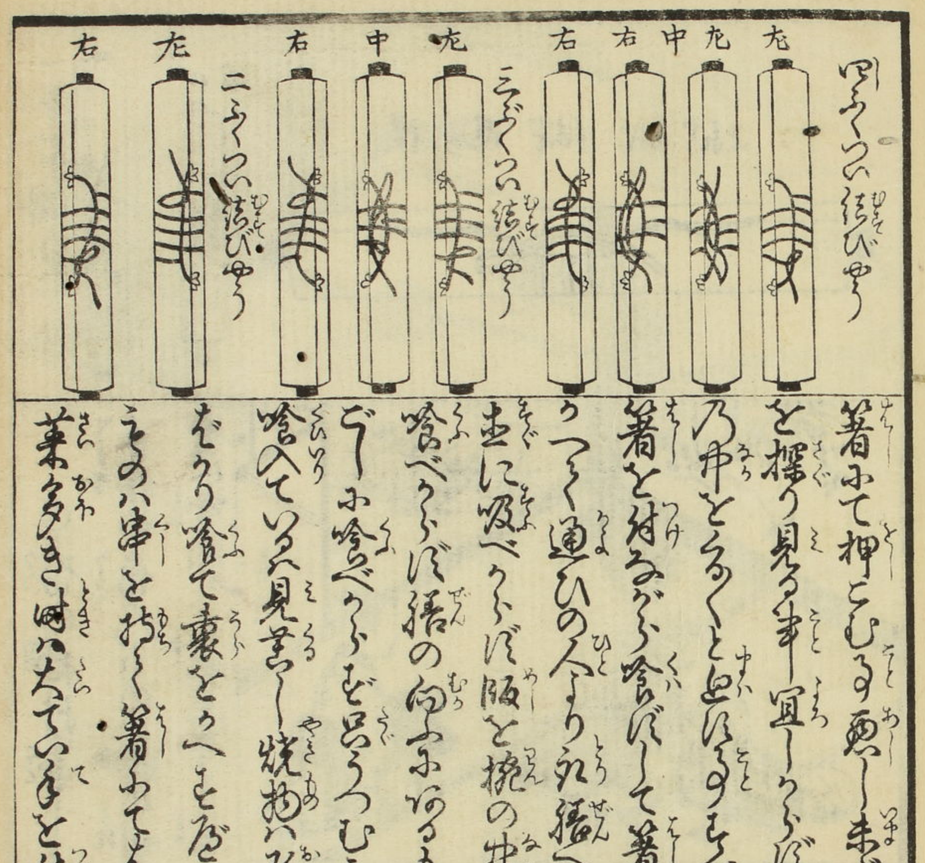
ゝり二度ハ右のゝ
たりへうつゝ喰又右のゝ
ゝて下ゝ喰べし四度目
ゝりハたりゝそれたゝて
下に喰てゝ俵俗ゝう
級ゝある菜ハ伺れ右ゝ
ゝわゝ出ゝハ右のゝにて
ゝゝたりへうつゝて喰又
右へゝりてゝゝの石へ
ゝ喰べしたの方へゝる
菜ハたりのゝにゝゝ
右のゝにゝたりのゝの

菜をとりたりのゝにて右ゝの菜をゝゝふべゝふべ
ゝゝ新ゝ何ゝてもむつゝゝゝゝぬのゝりをゝ
つけ一度づゝ喰べし九切るゝのゝハもゝゝにゝふ
べゝふべゝ椀の中にゝゝいゝ用ゝゝもゝゝ箸ゝゝ刻
喰べし又畫ゝゝのゝるゝゝのゝるゝ喰ゝゝたべ
ぬゝゝゝもゝゝゝ女中ゝゝゝゝひの俗ゝ汁ゝゝゝ
料理ゝゝれゝ鍋ゝ一ゝゝゝゝゝゝゝ抜ゝゝめし
ゝゝゝ菜ゝゝゝゝゝゝ口の内を皆喰ゝゝて後つぎゝ
ゝゝべし汁を吸て菜を喰又ハ菜をゝゝてゝゝに
外の菜をゝゝゝ足を揚り箸といひて云ゝゝ
ゝるゝゝゝゝゝゝ俗ゝゝゝゝゝゝ一ゝゝを二ゝゝ三箸
ゝゝゝゝゝゝゝ

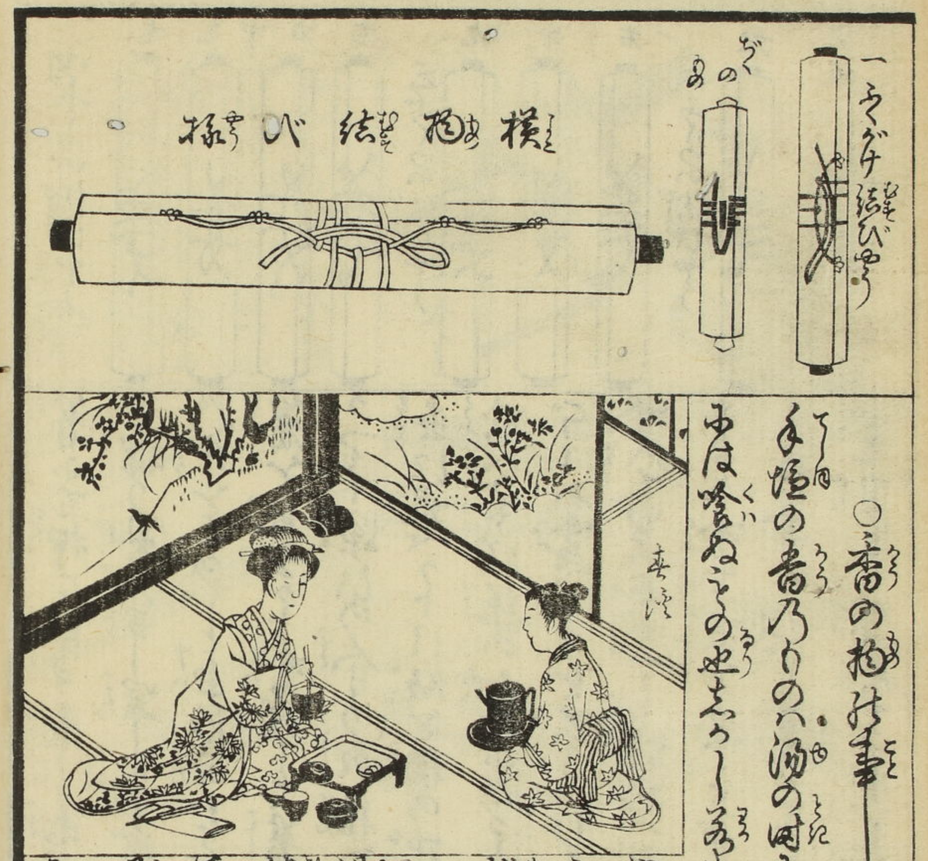
一とき老箸作ふるとて老とお伝ー老べー

○三帽子をめけるゆいまづ中ゆるをうけ次よあ位つぎふる位とうけ老ーゆ位中ゆるる位と次ゆ老ち老ちつ次べーすに借乃

汁いとそや吸ぬそのこ抜箸をえく繪をやくらん和ぬをや咬んとぐづくと見合ひるの見ぐづーそーに付るあし粒とこも箸ゆて蔵に乃ゆ西ー又ちーゆ付ふ向阪つぶをほふてれといむべー箸い深く祈ぶれべつふに書りの汁の実なごの下ゆ和ぬとちぢ記して咬べらふにい中へ




箸ゆて押こむる西ー寸ぐ河のそ為やと撥中を撥う見る寸ー宜ーらふに番れちのゆく湯素乃中とるくと西ーるるちくらふに咬んそーく箸を付ろぐふ咬べーて箸をうるる西ー汁をうつく通ひの人ーうれ猛へ一ふん抜らに一言虫に吸べーらふに阪を撥の中ーくをーうめく咬べらふに猛の向ゆるるれをれにして及びぐーゆ咬べらふどゆうつむきて兎角の接接もに咬へていふ見寸ー焼抜ハ屋貫つきたるふ表ちうう咬て裏をうへをぢうらふに串にをーたるこのハ串を抜く箸ゆてきみ咬べーされども菓多ちゆハ大ていをと付ざるゞよー




○香の物付事—

香物は喰ぬうちの也ちゃ

ぬぐうち手ぬぐいとかいりてくるしめつけ

排ゝ間どる也

○酒とのむ事—

酒いそしとあつかもちて

燗かおきあ酒べし茶にて間どるや見ハ食

るゝ切りて挽ゝ酒ちやるゝぞうけるこ

○湯漬の事—

湯づけハもぐく洗ひめしにして挽ゝこりていざ

こよ西へ箸をそめ中をくぐり酒と七ぐにうけ

ぐしー葉ハ番の物ゝ喰ちゝめ其ゝ箸のこぐ

ちぐうのめと喰べし汁ハ吸ひ実だけを喰べし

むけも西べらひ湯漬の海ゝく酒ゝ箸をも

そくぐ酒ぐうゝ吸べし番の物も喰ぐうゝ

つゝの酒浸れ酒とゝ

○粥の喰やう付事—

粥をくゝ西ゝ先汁をちゝめゝ吸べし西ゝ汁を

うけぬぐうし延も喰のとさぬとのとゝ挽ゝ

○うゝ番の事—

ら方ハ一幅ゞけハ上座のまへ
らべ一二幅ゞハ中と客
位と上座れまへ主位と
下座のまへらべ一一ゞ
ゞけ二幅ゞこゞゞゞを
巻と結の結びやうに中
重ゞれゞらちあり是を
きれゞゞゞゞ甚上下
をゝしゝ掛る間違ばゞる
ゞゞゞりひとびゞハゞに
あゝハゞゞゞ

○巻ひの者を結ゝ人ゝゝゝ
ゞゞ結ゝハゝやゞゝ清て
下ゞゞるのもれゞハゞれあり

ゞゞ人ゝり我へ自ゞゝ拙ゞゝれハ客のゞゝを持ゝ
社と立ゞゞ人へ蓋を液ゞゞして我ゞにゞるゞゞ
たりのゞハつゞきて右ゞて炙く頂きゝとの社へ
帰ゞゞゞ又けのたゞゞゞとのかれゞゞゞて炙てゞし

○茶乃乃事

茶の乃ゞのゞゞゞゞ

放ふ通ひと称へて扱べし
○通ひふ多る人ハ路名ん
を錆め達を多ふつけ
ものゝ道ゝ遠ゝ
ゝ
ゝ

我身のからぬゆうれんは
ゆうべ一むこ一まより
下へおーーておくよー
ねまきの玉ゆーいせんたり
の漆をつきたれ漆をつき
さゆよ茶を下へおくるり

春溪

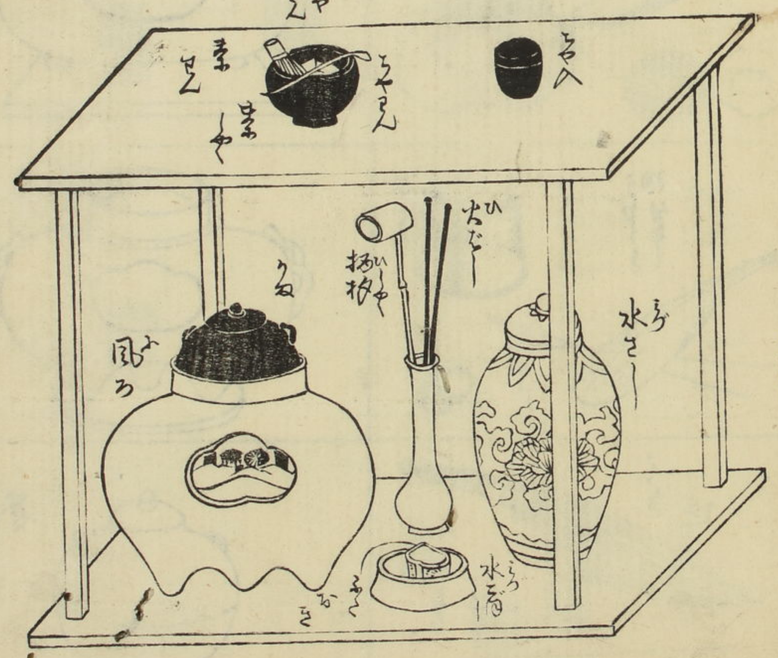
亭主の出世ー和へ茶碗を出ー亭主
れくー湯をくくー水こぼーへのるは茶和をれるくば
は仕業はばされしを接拂をべーきるーーーくく
茶のんがけるよ女茶へ茶をいざれい亭主は茶礼
なりくー白ゆをくんて汁ふべー。濃茶を軟
武ハきを人よ一ふくをの濃るれを迫世ーり茶乃
湯者流の武とて一ふくを粉へよまハー呑ハ事
もくーよるぬる世移れども高世の流りるねを
も濃武の一つふ茶来まり拭茶ーーゆハねふべいぐ
をべーーむ不洗茶をくておけり吹やうおー
もむりーーきるハなれのと知るべー又亭ーを茶ふ
ゝを茶道を知りなるんあをとんべて茶をいざる

女筋下ノ北四

かくてたりのをとぬきを
をはくーーぐみるは拭おだい
ををーーおよ右のよおくく
茶づまをゆめくーーおーど
をのき漆ををて我たれ
方へひくき其ーーる漆を
又ーきをるれ漆ををて
右をるりをてをべー茶
のふちれやぐめハ右人乃
句ふ我茶とんはべー茶の
拭ふ限ふーーー何ゆてもーー
見ゆるるものハ右れんハ乃ーー
べー

○茶の拭ををゆ人大神

茶子陽のく景

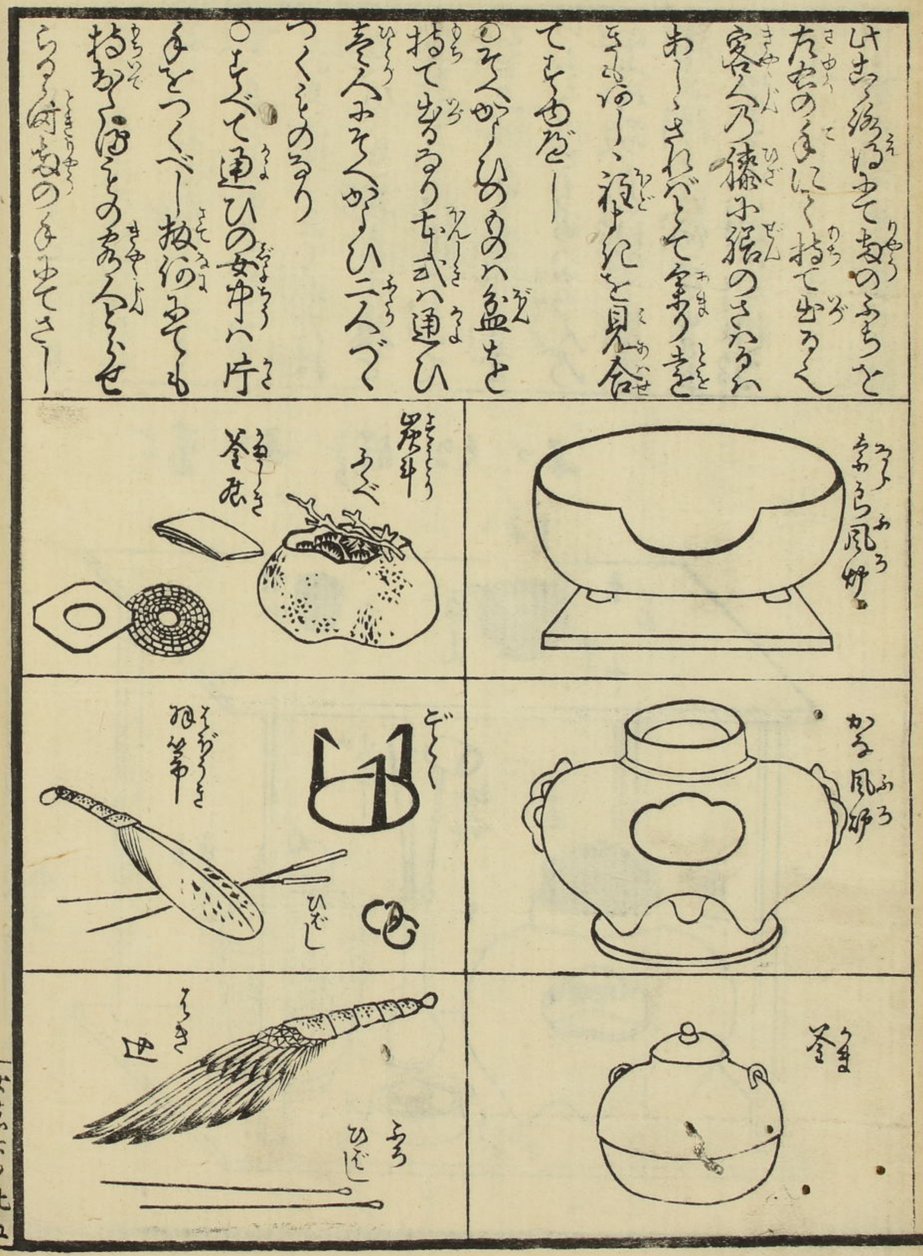



春溪

けさ後は出て女のふちと
左右のまくく拵て出るく
客人乃漆小猪のさかるい
あ〜さればとて客り主を
きたのゝ、後ゝ紀を見合
てもゝ也〜

○そくかゝひのものハ盆を
拵て出るるり女式ハ通ひ
主人みそくかゝひ二人で
つくるものるり

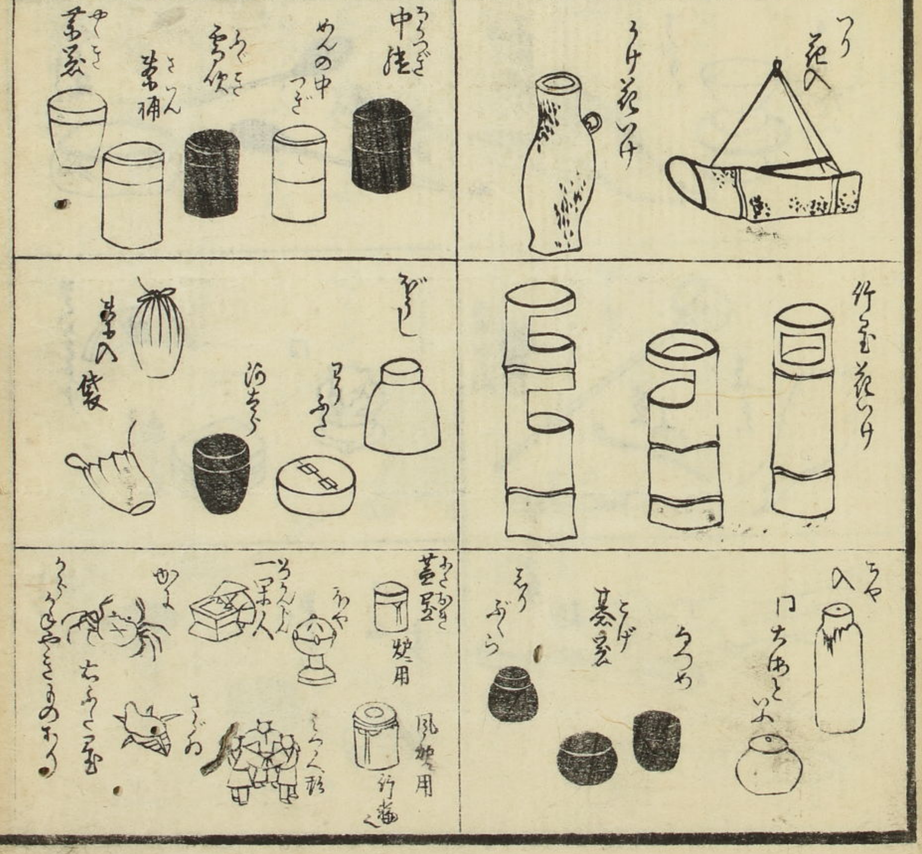
○もぐて通ひの女中ハ片
手をつくべ〜扱の手も
拵おくものあんとゝせ
らるゝ時女のまゝてさ〜






べ〜

○同じ位の主人お
ゝ人時ハ主ひ主人ゝて
一段小猪とゝ也べ〜但
し猪とゝ也れを上ろ
ものひおろとゝ下ろこゝ
○葉を引を葉を敷とゝ
○阪つぎ拵ハ裏の阪ハ阪つぎ
のゝをゝそ裏の狐小豆
拵出べ〜色ハ豆とゝく
拵おべ〜扱右のゝを作小
して阪をゝ也ゝ時ゝ桃を
出さべ桃の糸でとを張と
つまゝて糸とゝ左へゝと

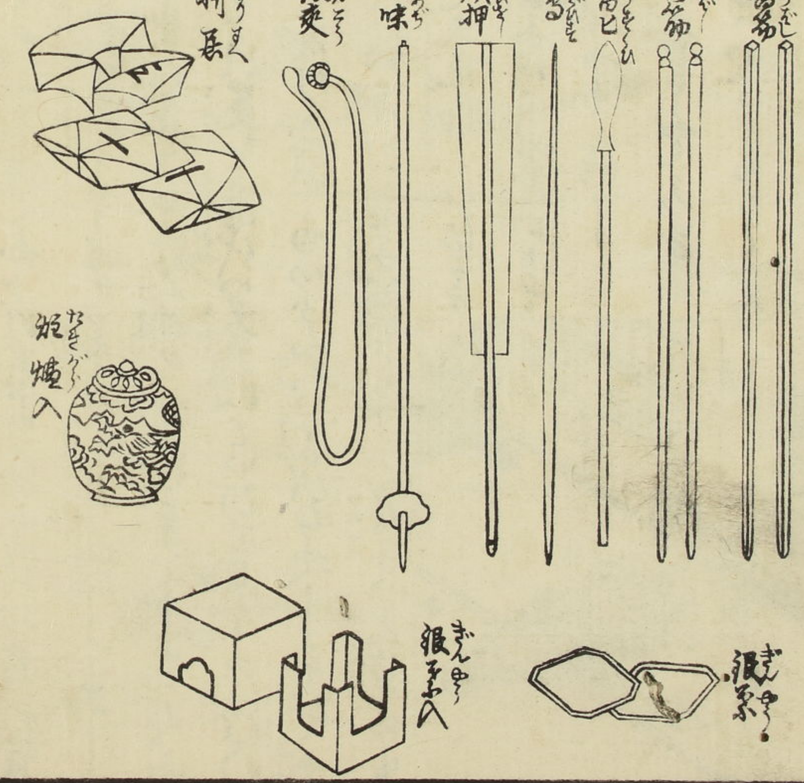


右のごとくして扱みをとり
阪の中を左へおし引
高中を二をくひつきて
又元出し時は右のごとく
つゝ左のをとつさて出
なり阪はそんたり左盆
中くかゆるすゝ其外
のことをとゝめる時ハ盆
中くかゆるなり
○汁をとゝめハ盆中てこの面
べゝ客人より盆をせば
ゝてゝ〻ゝぬぐ扱ておろ
後をとゝ余のことをして
出るゝさゝ出し元右の

ゝて其盆を元盆
ふちへ付ておきあらて
さゝいをとゝ
○冷汁を掘中く扱ゆる
元ハ右中扱たをそゝ
を扱てきべゝつゝ元
右の大扱ゆ箸を扱さて
たゝりハ汁のゝ元ゆひとゝく
ゝてつゝべゝ
○汁次ゆて汁を扱ゆる
元ハたゝりのゝ元大扱ゆ
るの面へいれをのゆの扱ハ元
へ中て汁次の盆を作向
そとゝきて扱ゆ扱さく

事大ゆ不徳こゝゆゝ其ゝ人の中ハ功者元有
なれハ其人ゆ尋ねて学るゆ元ゆ
き事ハをさゝ中ハ大冊の徳徳集をそゝ
ゝゝ元是と尚代ハ茶れといひて日中の徳乃
ぬく始なゝハ元ゆゝ元ゆゝ人ハゝゝびゆゝべゝをべて女
中ゆ元紙屋ゆハ箒子をかゝるべゝ箒子ハ竹塗のも
のゝ又瓜紅といひゝ
甚ゝ元ゆ女中のもて
ゝゝゝゝ元ゆゝ
○番ゝゝゆゝの半
書ハかゝゝゝもきく元
同ゝ事ハゝく古物ゆ

たのしい着を拵べて座に
置とゝくうへ小口の湯
のたゝぐりと清るゐ
○通ひのすれり遠ゝ
ゐたのきの人ゐきへりてそ
とかりにまりて相ゐもるる
人と通して好ゐて
彩べーせまれかゐ多相ゐて
ハ通ひの前ゐ汗髪く
○阪と清るゐ赤ゐりゐ
まりて紙の外清て雪せー
由ゐれども是ハまるぐゐの
るゐてまるぐき人ゐは
ゐきるゐり一熱い勢む






十姫香紀録書拾の部

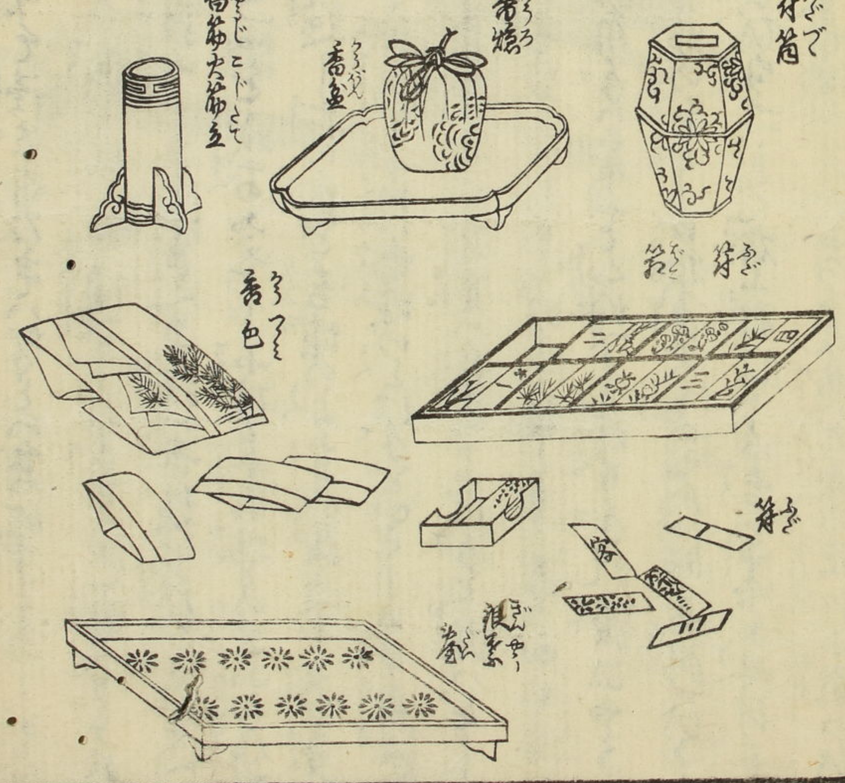
十姫香之記

一ゐ様 二栗舟 三ゐ絡

| | 三ウ | 二三 | 二三 | 一三 |
|---|---|---|---|---|
| 若松 | 一三 | 一三 | ウ一 | 二三 |
| 紅梅 | 三一 | 二三 | 一ウ | 三三 |
| 白菊 | ウ二 | 二三 | 一三 | 二三 |
| 水仙 | 一三 | 一三 | 二一 | 三ウ |
| 異竹 | 三一 | ウ三 | 二一 | 二三 |

月日 亭号

紀録の書ふまゐの月と日を
ゐるゐ当りてゐ甚亭を乃
名ゐあるひハ清号かゞ
を覚るゐ



べられたる後るまの炭べうふを布てれを考ふかり

○猪を下る時はあるまそ取こふ〜沒へんさう猪を下ふ

置て又鍋を立て煮るん見ハ猪をを煮る時ハ煮るる

○茶をまつ〜もるハ茶甚ふのせて置ふべし〜ちのまにね

たのまを落て出べし〜賣茶屋菓ハ出ふ問ト信菓ハ甚ふ〜不洗多にのせて出

こ但〜客人へ茶ハ甚天目ふて出べ此時茶乃ふおあく

式法あるもふ

婚礼式法の事

先婚礼の式ハ色〜法あるるもれども上川方ハ其家ハ例又ハ国の風俗有て一様ハ定めがたし〜ひとしてもかくの如〜其家ふ仕来りたる吉例わり分限ハ無ようとり約ふと第一とし財ふ無ぜぬすに法をたず〜〜

菓とぬむハ後〜ひとゞ道具ふを

みる使せく用ひべきなり志うれども

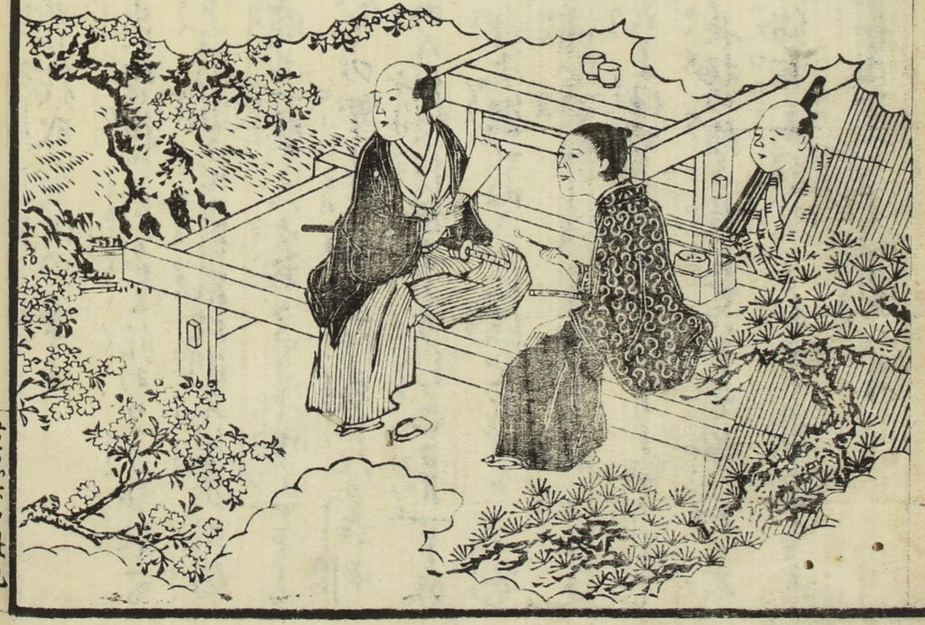
長柄の銚子肴合せハ中て砂人乃本

紙布ふハいろとおまいれまきまく

知ひべきなり仕事なり

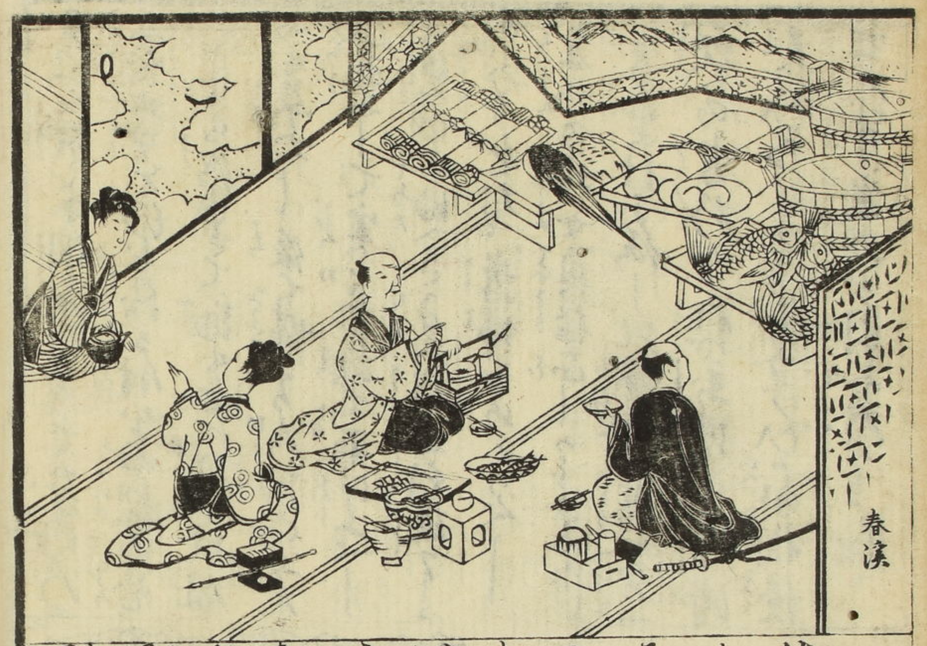
○見合の事

夫婦の縁をむすぶこそいとおさうぞくれあわなれば後は夫目容のそ見合をふわふべし夫相愛の形儀をえあらとべし媒人実事を以て家結へき事也仲人のこゝをはあるれ定規して双方共云ぐふ陽人ものなれば曲を解拒痛ふを外何小者ふべわし也色まべ語ふべし彼ふぐのみさ時はふく孫く長久の相ふさしみして末く双方のふこびふう又酒を以てふう結ぶ





とを以ふ目くふ相違おふうて家内乃不合此ゆをひど結ふ附ふ為親のむふ子ふしも落ゆをて動もれば家れ破ふも及ぶべし張て媒ふ人ふどいぶんふ也ふして実をを以て取計ふべし又聟のふ始へきふ多ハ好逸利欲ていくくどたで孝婦をめふべし孝ふの婦女貞操ふしてふざるを三年愛れふ孫ふ以婦女を要ハ先一親への孝行なれば家潤ふふ得たびひるくふふもふふひる那相続せん事幾許ふ日お待ふふや




○吉日を撰ぶ事

結納ハ暦のおさんたいふ婚ごりゝ
ゝ
ゝ

○結納目録八目録書也
表書きハ目録書ハ使者ハ上下又ハ略
して祝儀帳書也
○清和出ハ目録の次第
右〻の巻に奥書あり
又ども九世通の新和て其
時のよろしきよ様也べし

目録

一　一
一　一
一　一
一　一
一　一
以上
右目録之通受納仕候
月日　何〻殿
何〻進候

○持参物諸品〻
○小袖類
一　地白　一　地赤
一　清水納言家板
○女道具類
一　琴　一　三味せん
一　菓子盆　一　提重
一　火鉢　一　火箸
一　炭斗　一　煙草盆

○嫁入行物目録ハ双方
とも赤名を記さず立目
録なり書ハ及ばず
○聟方より行物清取
目録ハ真書と双方の名
を〻むすび書ハ
双方とも小間のむすび
ハ字形にて書べし

御行物目録

一　一
一　一
一　一
一　一
一　一
以上
右〻運清取申
月日　何氏進
何氏進候



一　地黒　一　白黒垢
一　黄色垢
○帷子類右同類
一　袷類　一　単物
一　おび　一　浴衣
一　まご黒　一　ゆぐ
一　夜具　一　蒲団
一　まくら　一　たび
一　蚊帳　一　麻ござ
一　硯箱　一　料紙
一　針さし　一　張箱
一　ゑいる　一　棚台
一　棚台　一　文箱
一　文箱　一　見台
一　提たご盆
○荒道具類
一　双六盤　一　香乃具
一　てうちん　一　火盥
一　湯つぎ　一　もげ釜
一　毛ぬき　一　傘
一　刺刀箱　一　雪踏
一　文箱　一　草履
一　わしざ　一　炭

一かけき　一櫛おび　一小人形　一大張子　一雪踏箱
一帽子　一絵ぼうし　一大はし　一角だらい　○道具類
一手拭　一紅葉袋　一かき板　一水引　一御厨子　一黒柵一流
○懐中くすり
一匂ひ紙　一泉紙袋　一のし　一絹糸　一臭桶　一屏風
一楊枝さし　一誓ぐみ　一夢桶　一絵張　一木綿糸　一長持　一衣桁
一下駄　一香づくし　一刻たばこ　一巻煙草　一葛籠　一帯箱
本類
一同　一指　一同　一着　一挟箱　一行李
一百人一首　一千載和歌　一うちわ　一扇子　○紙類

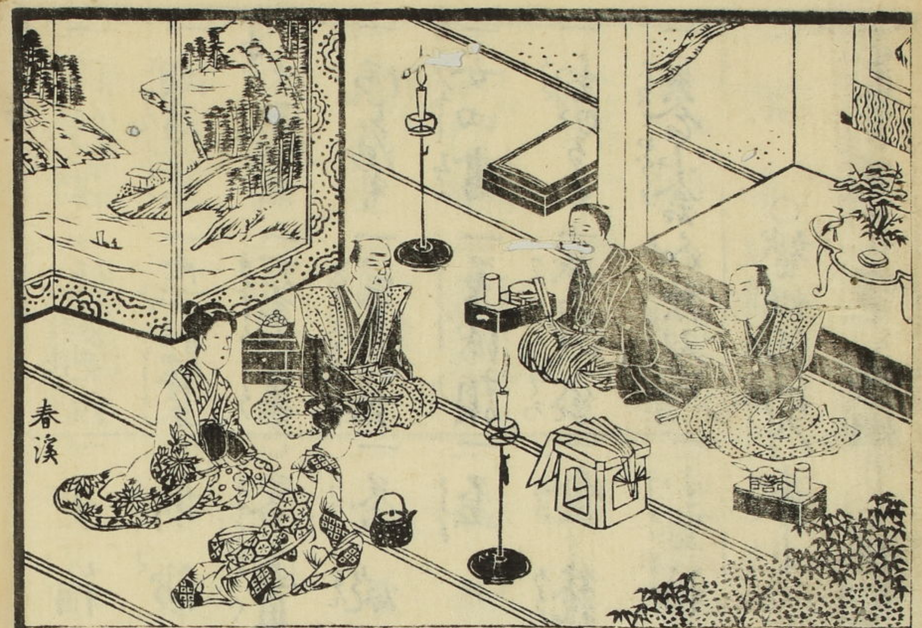


一法華経　一源氏物語　一手箱　一手ぐら　一色紙　一硯　冊
一湖月集　一九代和歌集　一絵　一守刀　一落用　一延帯
一十三代集　一万葉集　○客道具　一枕原　一半紙
一ちご絵　一業平物語　一茶碗　一茶壺　一奉書　一美濃紙
一女四書　一弟紙類　一盃　一皿鉢　一尺長　一巻紙
一あかるく　一婚礼紙　一食籠　一かんるべ　一直紙
一異合小舎和歌双六　一小重箱　一枕箱　右大略如斯欲

○婚姻結納乃事

まひよ嫁とりゆく婚姻のりと定め聟の方より結納をつ・のハ秀

町方に用ひてたるより有ざるものを記せり



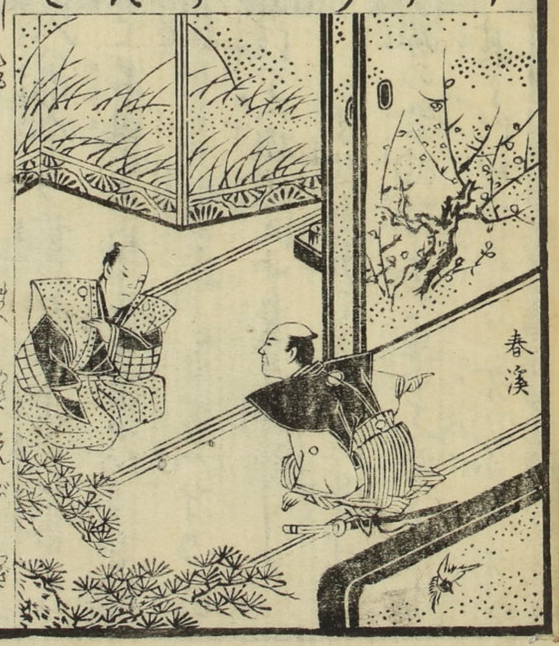

りと常陸帯の仕様といひ伝ふ云
々とも軟らかの帯ともいふべき帯の名称ある
ひは三巻の三種一荷一種なりと又荷
物徒らに斗積十ヲ背五種なり背ハ
昆布縮緬紬串絶鰹ぶし等なり
又小袖のるゐハ一重二重ゆへ
皆端折なり小袖一
重のうち一ツハ裏表ともに一ツハ表
紅色裏ハ紺色にて見合なるべ
し也一端ぶ板の色こゝ杉原
紙二枚ぶ中を水引にて結ぶ
べし足りなりてハ仮結ゆそ



ゆあり左ハ仮結常帯一ツ
二筋ゆ結ぶ大小ハ長べし尚器
なるハ常式ゆ金根ゆ添ふ

○因縁書換の事

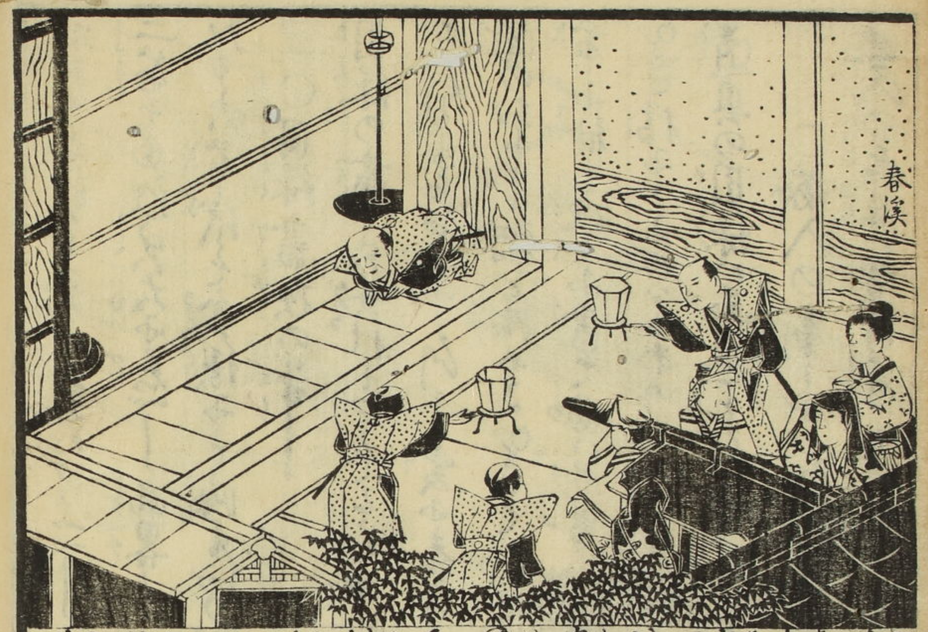
因縁の書るゝハ女性ゆ成ても事
なれども男子ハ家ゆ寄ゆ
因のおゝ朋と始めゆ
常ゆ紙と添ゆ書ゆ
ゆ結ぶ昆布引結
ゆ結ぶ




道具の因縁ハ男のごゝ書べし

○嫁への事

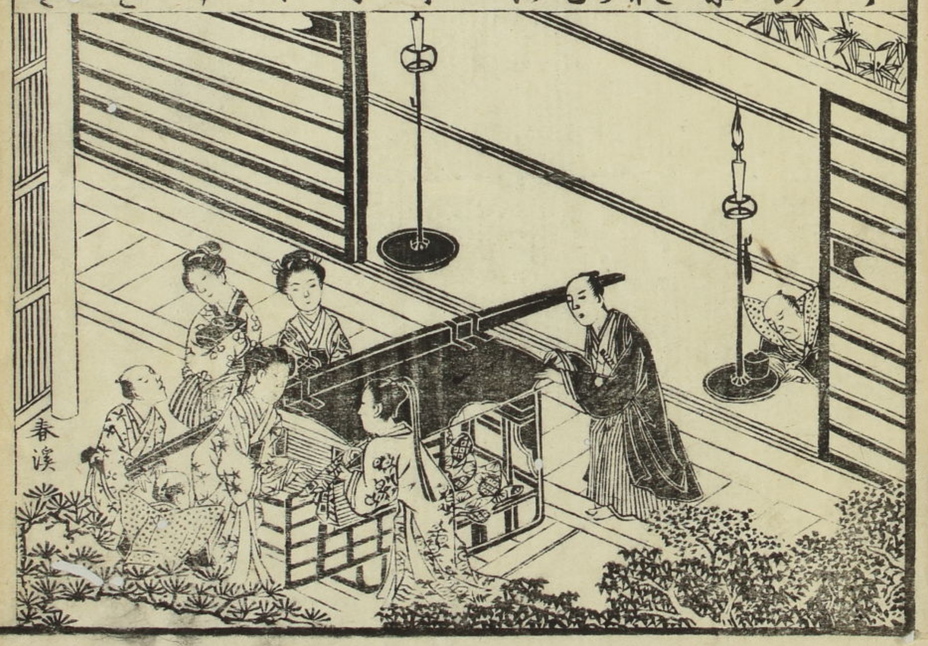
嫁への右日ハ聟のまゝ定むべし




ゆくゝ自然垢を落るゆへ祝義の
本式なり庭火を焼いむゝーゝり
有式ゆゝく放実ゝ田舎ゆてハ炬の丸
ハ而巻さると門の右よりー二十六
巻たる式なりゆ焼をゝ行うさて聟
入ハ嫁入より前にをゝーーむ畧ー
て茶後もわれゝも本道ゆ行ゝゞ結
納をゝて聟入つゝゞよ嫁入なり式
法ハ大概嫁入ゆ変るゆなー
○茶拍子入れゝゝーれ事
嫁の茶拍子まで畢をゝおくなり
其ゝ紀聟立出て茶ゆ入ゝをを



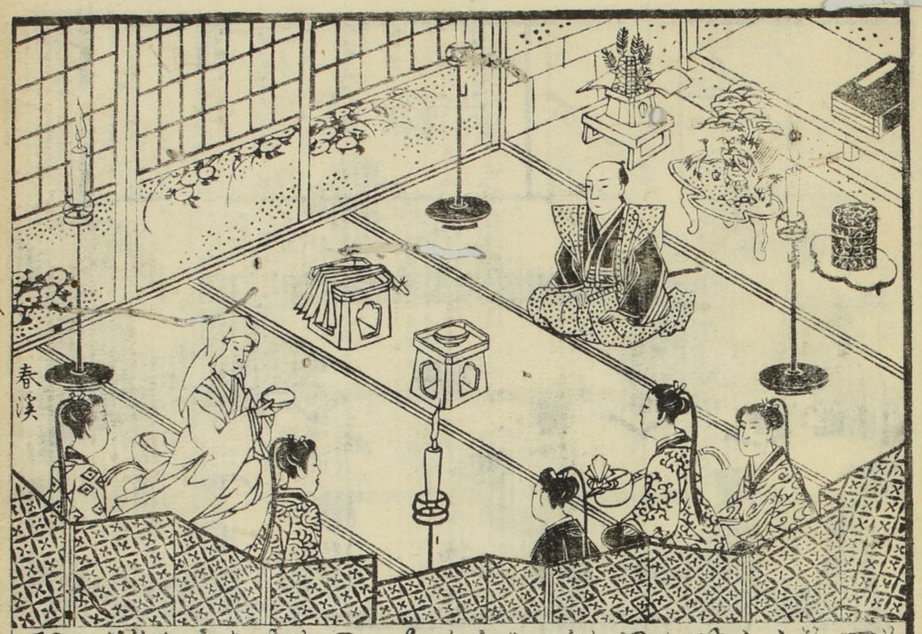
をゝ事ー故実ゝゝゝを添てそのまゝ
内ゆ入ゝより取結女郎いで先ニーの
うちなる寺刀を取出ー裏流の人ゆ
渡ー嫁を案内ーて紋紙の間へいれ
表ゆく紋紙をゝ事ー衣紋流ひゝ
を鎮めまゝり社家へ出るなり則
ついぞくの女ゝ流いづる社の次ゆハ聟
ハゝ社嫁ハ下ゝ流ゆつくゝ結女郎ハ聟
ゝ方の座ゆ対嫁の方ハ外流の女座く
盃その外のゆを取さゞきなゝとゞー
生実りゝ流時そゝ侍ゝ御のーをゝゞ
をゝーニゝゆ東のーを杉原ゆて色



のせて花こをもお嫁さまを添るなり
あくて指出る女直に上座小さ中一盃
そのちらちらさしと出をなり

○婿入の盃九さ一　隣り敷の仕形

婿入の夜嫁より盃をとりあげ聟
小さをを足むしーしりれ放実るりむ
いろくと此さ中ふつさ記わをどる古代より仕来る通ぐうー其後紋屋ふ
へく盃るのあり足を紋屋の盃といく此時八男ちりのさをめ女へつらいするり
○真の祝言八式三献をいぐをなり爲ーもいく足八所ま通用の式也
敷人お人いづる加へ聟を呼ふるーて居るべーー長柄八年ま一らちさーれ
方へ寄りてお柄指るぐら引渡ーの基を雨て男のまへむ、ひろ口ち
て嫁の呼小とく盃く介添盃を取酒をうけて嫁ふちさ沢嫁られを飲く

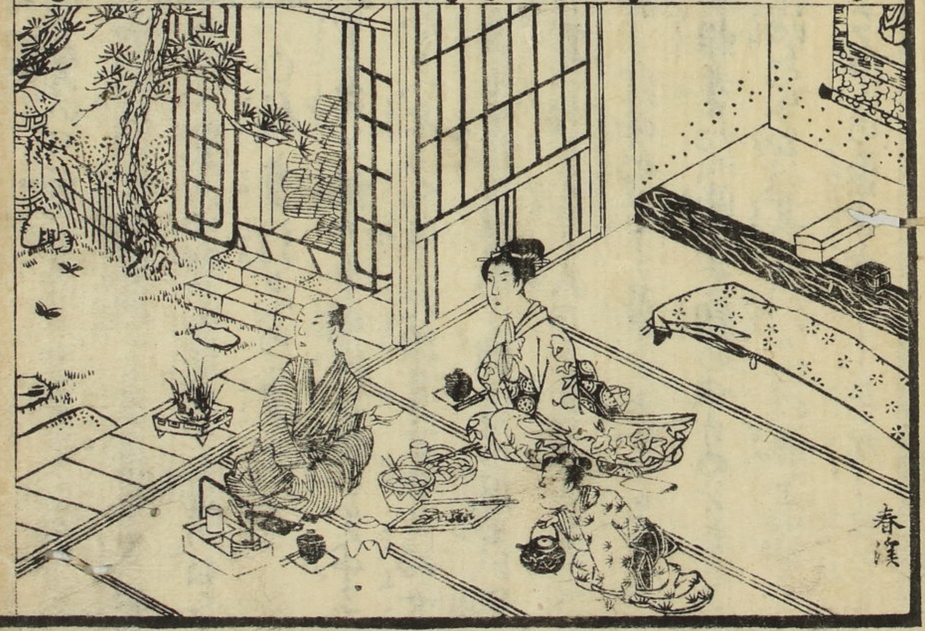


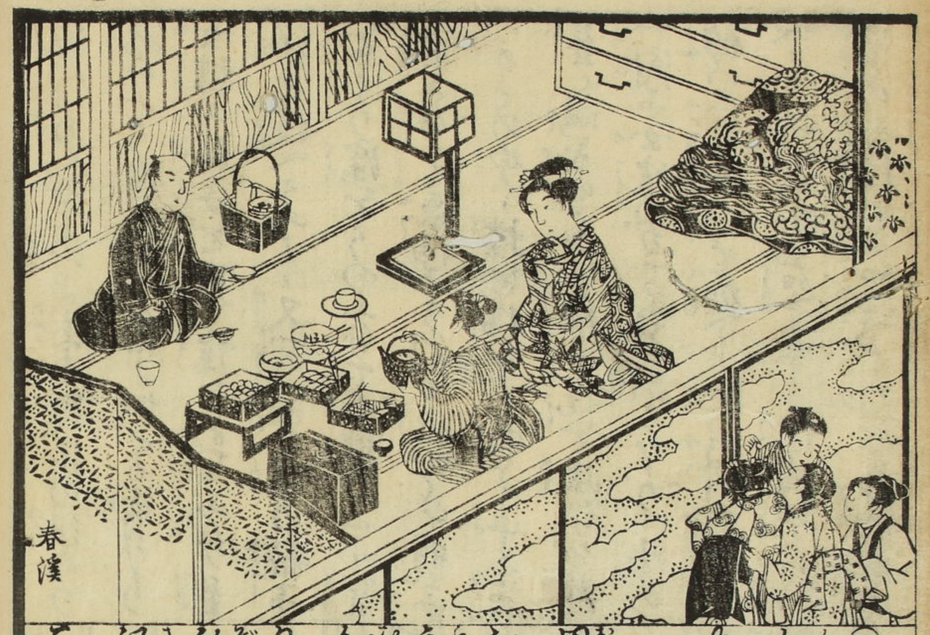

一献加へ又除べーー敷人八家たの方へ
立て下中行長柄を下ふ盃加へ嫁
嫁の方へ行て三度目をつぐ嫁三献
目式加へ除て盃を基ふ小く足ちり
敷人盃をうて聟のまへ指くべー
聟その盃を受て酒をうけ除る敷
加へのる右れでくもべー其盃を一
の下へ置ーまるとれ指盛を出さど
式八うちみとて鯉のうををつくり
七菜ふ二すけ中のるさふ盛右組た酒の
贈をさーて金銀の袋を手て出けく
ねとりハ鳴中く作る足八式三献をや

つゝなるゝ其ゝ紀聟二ま目の盃かて
右のごとく三度加へのゝ嫁ふさをや
嫁も又前のごゝ呑て其盃を一の下へ
ゐるゝ紀船盛をさゝぐゝ也主も
式の時ハ猶着て羽織の紋どころを
作り回く猶を小口切にして三上ふ盃
右組たり組の猪とさ味をかて着て
出をゝ舟盛ハ海ゐにく作る中式ゐ
うち舟へ足ハ畧せゝのゝき時嫁ゝ三
枝目の盃ふて前のごゝくのゝ聟へさを
べゝ聟ゝ前如く除て納るゝいづをも
三度づ加へ除てゐ三ゝ九度となるゝ



敬人ハ右人ゐて外ゝ右人瓶子の役ゐり
始めゝり瓶子ハ生酒ゝ肴なり肴
女蝶の瓶子を取て婿をあとゝ付盃
酒を捉へうつゝ又一人ハ男婿の瓶子
をゝり婿をとゝ付て女蝶の三ゝ盃
盃さけを長酒ふゝ盃也ゝて瓶子
ハゝりゝのゝく蝶を指をゝ有ゝ中ゝ盃
盃ゝ略式のゝ瓶ハ瓶子提を用ひゝ湯
一対ゝ女婿男ゝふを附るなり○嫁の
敬ハ二度歩行て加へゝ加の役ハ六度ゐ
べゝ此時ハ加ハ右ゝ左ゝ瓶子ゐ提の
口ゝの合ゐ中ゝふ通へゝ伺ゐ結び敬ゝ






○聟への敬は一足まわゆとて加ゆべし
加への役は七足まわて右の儀をとる加
ゆべし聟への敬は右祝わる小姓の役と
○雑煮引うへの事
男盃と納めし時神子提はなく中ふ
むうへ出るく出て雑煮を出す結女
良も加盃出るべし雑煮の膳出る時
聟は箸をとるべし其中ふは有べ
うべ出物皆〳〵盃を取かつをなり
雑煮なべ終りて鮒の吸ものを出し
酒も出る其後引うへ膳をひざ
とんくの盃まで有べし出席長坐ふ



なるぬゆりにも後はべし

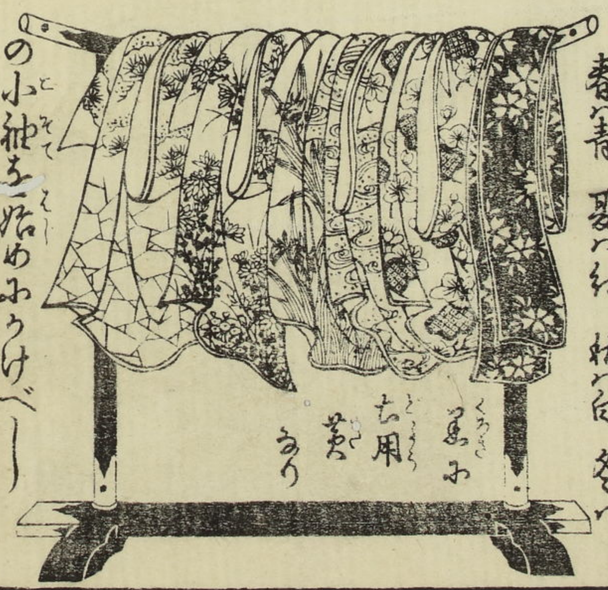
○色直しの事

女の小袖をぬ白を脱ぎ後はの小袖わるひは又色金襴にて
色どりたる小袖と着かゆべく出て紀又壺のなるべし名を出れ小袖は
男姑めしり出たりのく嫁の方ゆりも小袖帯などひざをゆり聟その
小袖を着ていづく其外男姑親類家来出入の者ども皆それくの
を祝わるべきなりこのかゆ日ごとり祝場りむざなをゆみの祝義あり
ゆりなるはゆ〳〵無礼なれ無ようるもの稚とつべし婿胴の法あふまし
ゆくのおとし兎角ゆるもいとごとく其人の住ふまおべし祝ひさげを
用ひるべ式三献を出すべし器の引渡しゆて盃をせば湯ゆて敬くく
を祝むべし夫より下に成りていはを言猿猫一ゆくくと見く老ゆも見
るを紹者は寄りとのこまゆりよを人りゆくゆるると夫婦のりふ二つ

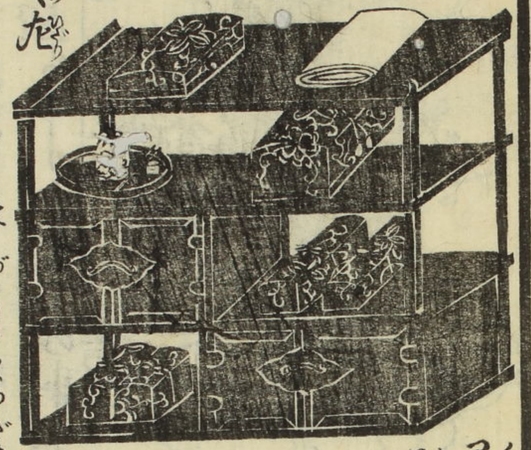
なるんや伊勢ど物くせ〜祝言うた和〜と男ふべうふべ紙ひ式二歌七人
三と御宮先男ハ女を物〜まべ女ハ男を敬ふこうかくべ微ホ毛豆れ事
ゑり婚姻の大事ハ只夫婦中よれこそ貝ゑ敬れ

○衣桁陽り乃事

衣桁ハ小袖ゑぶ掛るゆハ女の黒掛い上
ぐ衣を上ホゆう結ひ〜て色有と〜へ陽
ゑり男のホ袴下ぐへをとに衣ゑうホ
をゆかりそでたゝみ〜て中ゑ白よ
上ゑり手掛ゑっなゝぐたゝ〜に帯
二筋うけゑゝ又袖ゑを中ゑり二つ
ホ打てゑホ二つ下ゑ二つ陽ゑるもなり
いづれも伊勢ホ多ゑ〜甚時黒のいろ
の小袖を一結めふうけべし






○沖厨子黒棚ゑぶり様の事

沖厨子黒棚陽様のゑゆ伊賀半〜ゑ〜れゑぶ〜ひありてくそ〜その陽ゑ
一ゆうなゝぐ〜ちく道具の見合ホ位ゑ長貫尾の宜〜比様ホ〜ざゑ
ゑゑ〜勢〜て家習ひ学て〜ゑゆホ変ゑ中〜ゑ〜て張ゆそ〜ゑゑ〜ゑ〜ゑ
だゑゑ〜ぶ蝶花形の様やゑ百様〜て百様の花ゆれゑぶ事〜ゑ〜ゑ有

ゐひあり家とつゝめて他と紙どろ手一宿まゞ紙るゝ

○婚礼の陪膳ゆゝ云紙の事

○かゝを○ゞゞれ○まゝ○まゝて○おくる○さ肴○ゞゞろ○いゝまま

○みゝ○いゝゝゝゞゞ云紙を結ゝ云べゝうゞゞ又○紫○濃○云紙○うのゞゞし

なゞの衣装を云ゆゝと云べゝ又男子ゝをゞの扇衣をいゞべゝ也ゝ

ゆ立ゆゆゝゝまゝゝの事ゞゞゆゝゝ陪膳おくる也ゝ

島

蓬

の

図

組附渡之図

かゝゝけ三まい

右の方にちさと

ゝゝけ左の白ま

中角ふとんぶ二つ

たゝの白ふまふ角

ふ歩ゝゝ白ふ中ふ

みゝゝくのゝゝ

武三紙引波の図

右二

左三

一

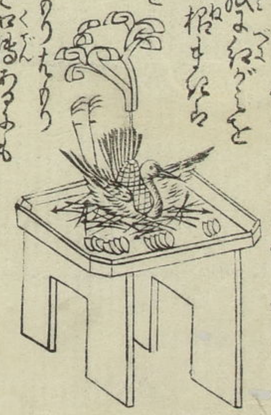
ゝゝ

ゝ

ゝ

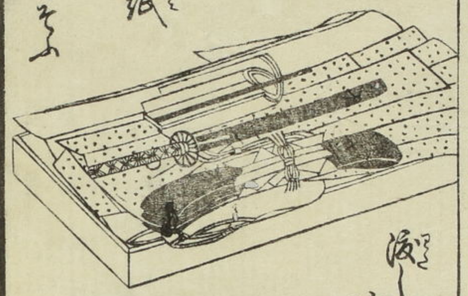
## 船盛之葉

## 盛之葉



## 奪引之物

小袖横様

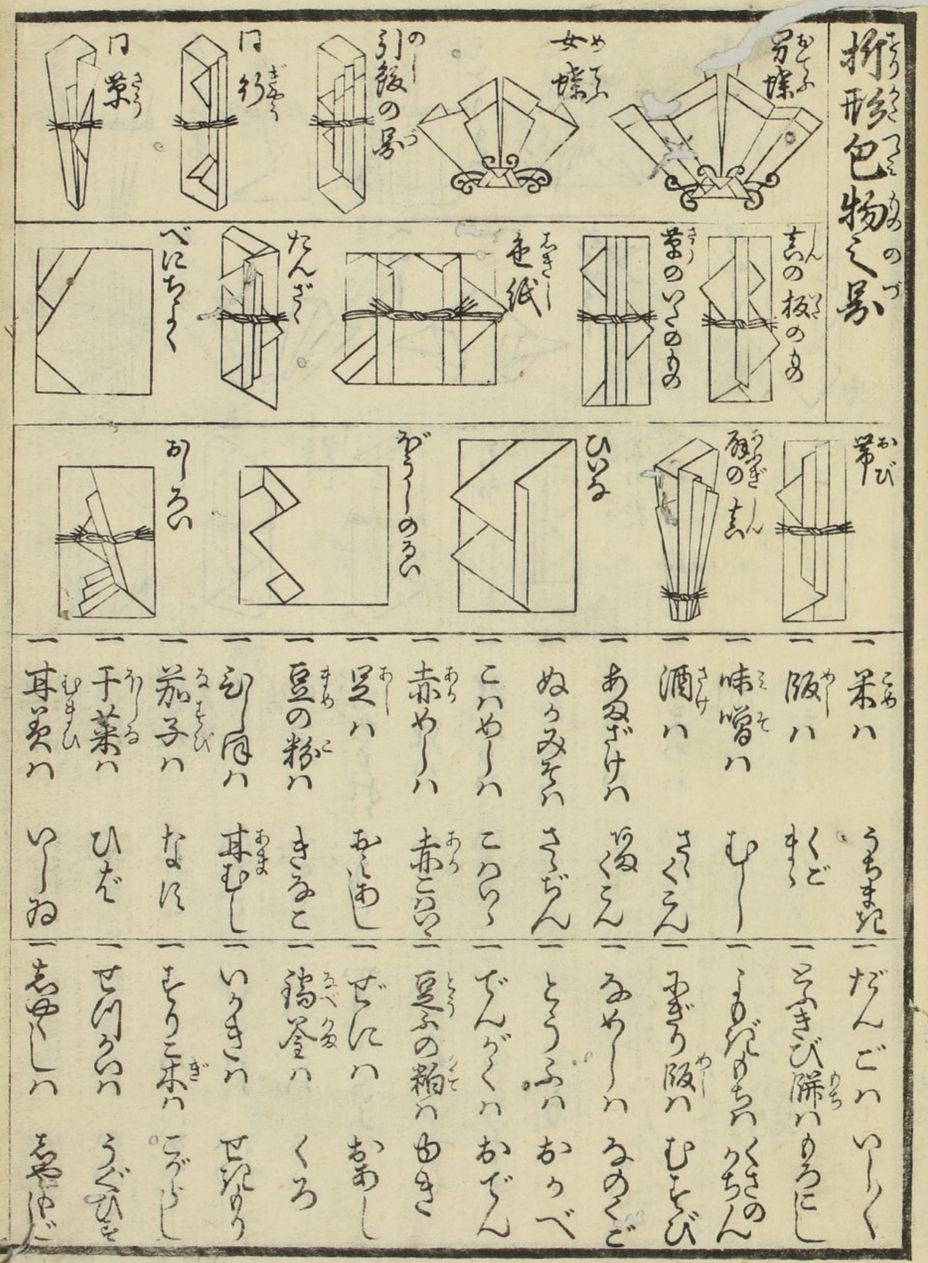


## 大和言葉

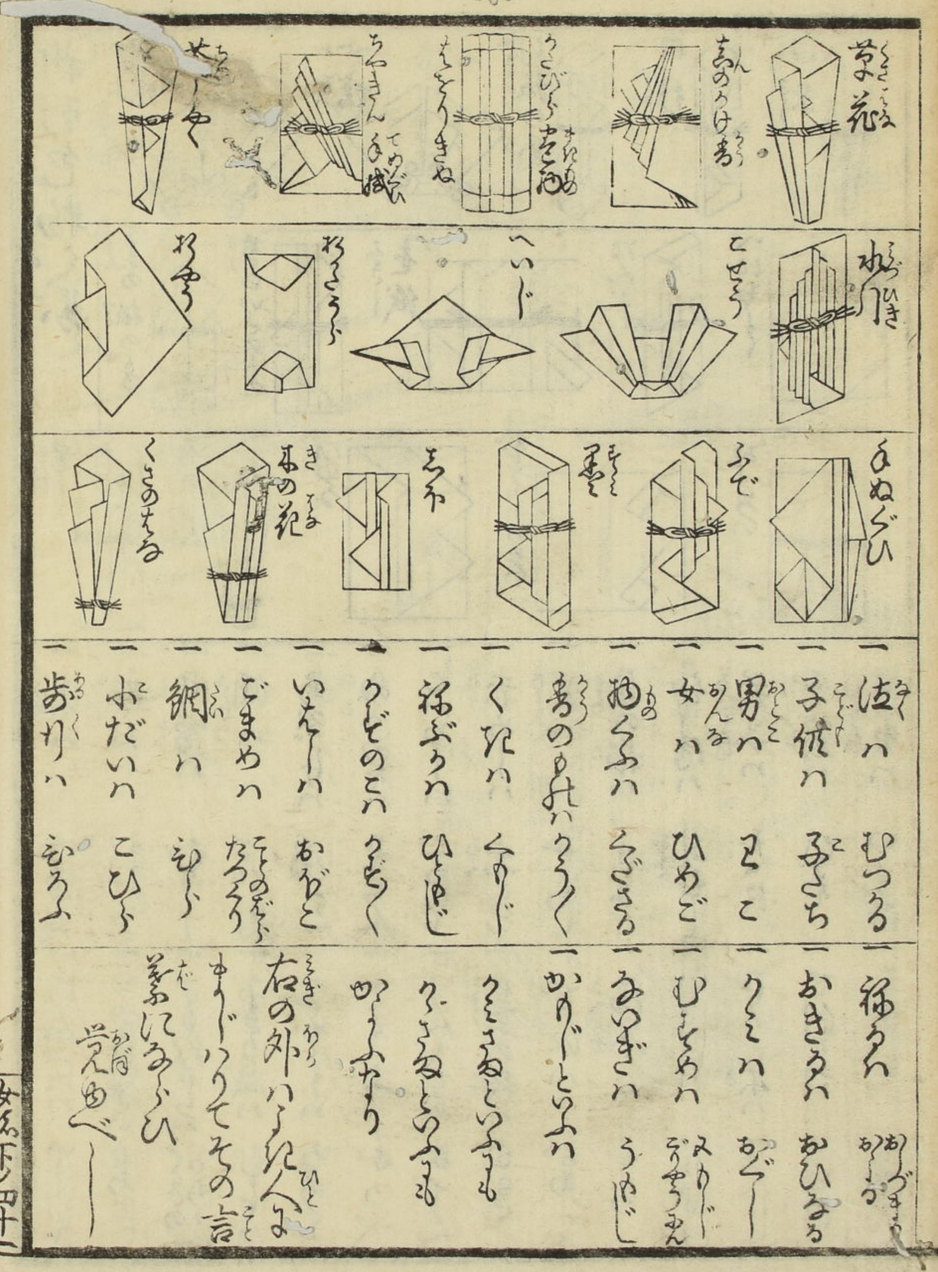
一きりのハ　かそで
一布ハ　おもく
一おびハ　あく
一肉ハ　ゆもじ
一ふぐ中ハ　よるのめ
一水ハ　ひや
一人とぶを　めに
一舟ゴハのるを　やに
一おまりを　ゆ
一ちまたハ　まち
一りちハ　うちん
一ぼうりちハ　おもだ
一ちんこハ　ちんぽを



## 折形包物之号



真の結び
右げと又
つけ結び
草の封付結び
左げと又
左の結び
右げと又
おきるむすび
たげと又
右結び掛び
石だみと又
井筒結び


草花
水引
ぬぐひ
へいど
くるのたる
右の外いろ〳〵人よりまじりてその言葉をあつめてみるひ覚めべし
法ハ むつる
子供ハ ふさち
男ハ ひこ
女ハ ひめご
猫くるハ ぐさる
書のれハ うつく
くれハ くりど
稲ぶるハ ひとじ
うどのこハ くもく
いたゝハ おびと
ごまめハ たろう
網ハ えび
ふだいハ こひ
歯ハ ふろ
稲ろハ ちゃ
おきるハ おひる
くこハ ちゃ
むしめハ ゆうぎ
ゆうぎハ うじ
かりゝとハ
くさるハ いふも
くさるとハ ふも
ひとふかり

子
丑
寅
卯
辰
巳
甲
乙
丙
丁
戊
己
庚
辛
壬
癸
午
未
申
酉
戌
亥
編輯
畫圖
書肆
天保十二年辛丑十二月發兌
大阪心齋橋通北久太良町
河内屋喜兵衛梓
木村繁雄撰
關牛部德風
春溪森有煌

春溪
文政下ノ四十二